

## その死

一九三三（昭和8）年1月、「地区の人々」を執筆し『改造』へ送った。革命的な伝統をもちながらも沈滞を続けていた労働者たちが、戦時下の高揚するたたかいのなかで再び立ち上がっていく姿を描いたもので、舞台のモデルとなったのは小樽市手宮である。

2月20日正午過ぎ、多喜二は共産青年同盟グループの責任者で詩人の今村恒夫と、赤坂福吉町で連絡中、築地署の特高に逮捕された。数時間後拷問により死亡、翌21日深夜、遺体が馬橋の自宅に運ばれた。検察当局は、死因を心臓麻痺とし、遺体の解剖を妨害した。22日の通夜、23日の告別式の弔問者は総検束された。葬儀は3・15事件の記念日に当たる3月15日、築地小劇場で全国的な労農葬としておこなわれることになった。葬儀委員長らが事前に逮捕されたが、この日の労農葬はさまざまなかたちで全国でおこなわれた。共産党機関紙『赤旗』、共産青年同盟の『無産青年』、文化連盟の『プロレタリア文化』、『大衆の友』、『働く婦人』、作家同盟の『文学新聞』、『プロレタリア文学』などが追悼と抗議の特集号を発行した。文化連盟はこの日を記念して『日和見主義に対する闘争』を出版した。海外の作家、文学団体からもひろく抗議がおきた。昭和9年3月作家同盟は解散し、コップも消滅、おもな作家の転向があいつぎプロレタリア文学運動は衰退していったが、中野重治、宮本百合子、小熊秀雄ら一部の作家はなおも時流に抗し生活の真実を掘り下げて、芸術的にはいつそう成熟しつつ、プロレタリア文学の伝統を戦争下も守っていった。